

われそくかみなり  
我即神也の宣言文について

西園寺昌美

## 自分に対しての語りかけ

『私が語る言葉は、神そのものの言葉であり、私が発する想念は、神そのものの想念であり、私が表わす行為は、神そのものの行為である。』

まず冒頭から、高い真理そのものがダイレクトに表現されており、宣言する私たちでさえも、一瞬、戸惑いを感じるほどのすごい内容です。だからこそ、これらの言葉そのもの持つエネルギーが、眠っていた私たちの魂を揺さぶり、本心にまで達するのです。

この語りかけは、決して他人に対しての語りかけではなく、あくまでも自分自身に対しての語りかけであります。この真意を間違えると、誤解を招きかねません。自分の本心に向かっ

て発するのです。

五井先生の『人間と真実の生き方』の冒頭に「人間は本来、神の分霊であって、業生ではなく、つねに守護霊、守護神によって守られているものである」とあります。我即神也の宣言文は、この『人間と真実の生き方』をもう一步突っ込んだ内容になっています。人間は本来、神そのものであって、業生ではない。よって、本来、私が語る言葉、発する想念、表わす行為は、神そのものの言葉、想念、行為であって、業生の言葉、想念、行為ではないのである、と。

人類は一人残らず、輪廻転生を繰り返してきています。故に、皆、前生のレベルにおいて比べれば、業因縁深き人々です。我も他も何ら変わりません。そして皆、今生におけるそれぞれの人生を設計し、自らの天命を完うせんがために誕生してきているのです。

六十億の人間は、皆それぞれに違う人生を歩んでいます。目的は一つ、本来の神の姿に還ることなのです。ただし、今生のみのショートターム（短い期間）で物事を考え、測ると、人類一人一人は皆、現象面においては十人十色、百人百色、千差万別であり、不調和で不完全である、ということになります。人種、民族、国家の違い、老若男女の違い、人格や能力、知識や体験も、それぞれの人生設計により違ってきます。

このように、人間を現象面のみで見ると、皆、業生のよう思われますが、決して業生ではなく、本来、神の分霊であるのです。即ち神そのものなのである、ということなのです。

しかし、絶対なる真理はそうであっても、現象面における人類一人一人は、やはり業生を背負い、苦悩が絶えません。そのため、五井先生は “人間は、つねに守護霊、守護神によって守られている。”と説かれているのです。

## 我即神也の顕現と守護霊守護神の導き

“本来、神そのものの自分である。”と心して思おうとしても、なかなか素直にそう思えぬのが常です。自分は余りにも神の姿とはほど遠い距離に位置しているからです。怒り、苦しみ、悶え、悲しみ、憎しみ、憤り……。神の姿とは打っ

て変わつての業生の姿そのものです。その現在の業生の自己と本来の神そのもの自分との間に守護霊、守護神が介在し、業生の自分から本来の神である自分になるよう、常に見守り、導いてくださっているのです。

守護霊様は、自分の深き縁者で、すでに悟りの境地に達しています。しかも地上体験者であり、地上のことに關しては精通していますので、特に守り導きやすいのです。私たちが日常生活において、究極の真理、我即神也の姿を限りなく顕現するよう、そしてその努力をするよう、導いてくださるのです。

それでもなお、我即神也の宣言文により「私が語る言葉は、神そのものの言葉であり、私が発する想念は、神そのものの想念であり、私が表わす行為は、神そのものの行為である」と大上段に説かれていることに直面すると思わずひるんではまいませぬ。真実を現わすことはそう簡単にはゆきませぬ。易しくもありません。大変難しく厳しいのです。

多くの人々は、自分が語る言葉は、常に否定的、暗黒的な言葉であり、それが習慣となつていきます。そして、感情が激するたびに、否定的言葉が飛び出してゆきます。本来ならば、神そのものの言葉、想念、行為を通して無限なる愛、無限なる救し、無限なる叡智、無限なる幸せを顕現するよう努力す

るものではありません。常に執着の愛、奪う愛であるし、赦しの代わりに責め裁きであり、叡智の代わりに自分のみに都合のよい人知であり、知識であり、幸せの代わりに不幸や病気や苦悩などがあります。

神の姿を顕すことは、誰にとつても無上の喜びであり、理想ではありませんが、肉体を持つて以上、感情がある以上、なかなかそうはいきません。それに加えて、現実の社会は不平等であるし、不条理であるし、自分の思うようにはなかなかゆかず、それが不可能のように思われてくるのです。

そこで、五井先生は『人間と真実の生き方』で「この世のなかのすべての苦悩は、人間の過去世から現在にいたる誤てる想念が、その運命と現われて消えてゆく時に起る姿である」と説いておられるのです。そして、すべての苦悩は、究極の真理、我即神也に至るまでのプロセス、消えてゆく姿であるから「いかなる苦悩といえど現われれば必ず消えるものであるから、消え去るのであるという強い信念と、今からよくなるのである」という善念を起し、どんな困難のなかにあつても、自分を赦し人を赦し、自分を愛し人を愛す、愛と真と赦しの言行をなしつつづけてゆくとともに、守護霊、守護神への感謝の心をつねに想い、

世界平和の祈りを祈りつづけてゆけば、個人も人類も真の救無限なる叡智を顕しつづけてゆけるまで、根気よく見守り、教え導いてくださるのです。故に、我々は常に守護霊、守護神への感謝の心をつねに想い、世界平和の祈りを祈りつづけてゆけばよいのです。

守護霊、守護神様に対しては、常に感謝の心で接するのです。守護霊、守護神様に対する感謝の念は、自分に守護霊守護神様の存在を常に確信させ、自分を見守り導いてくださることに對し、絶対なる安心感と平安さを取り戻してゆくためのものです。そして次のステップとして、守護霊様守護神様の本来の意図する究極の真理の方向へと自分が導かれてゆくためのものでもあります。

### 守護霊、守護神に願い、祈る意味

人類は、誰でも最初は今生における自分の因縁の深さに驚き、悲しみ、落胆し、常に苦悩が絶えませんが、この苦悩を取り除きたいがため、一心に神仏に請い願ひ、祈るのです。しかし、これもまた、究極の真理、我即神也に行き着くためのプロセスですから、最初は誰もが通る当然の道です。

守護霊、守護神に祈ることは、守護霊、守護神の目的と自分の本心とが全く一つに結ばれてゆくように計ることであ

いを体得出来るものである」と説かれているのです。

要するに、人類は皆一人残らず究極的に我即神也を顕す、崇高なる天命をもつて今生に降りてきているのですから、それを顕現させるために輪廻転生を繰り返す、今生での人生も展開されてゆくのです。その際、今の自分の心境と究極の真理との差が余りにもかけ離れていて、ギャップがあり過ぎるので、その間を取りもつために、守護霊、守護神様が存在し、その架け橋となつて守り導いてくださつておられるのです。

五井先生の『人間と真実の生き方』にもはっきりと書かれているように、我々は常に守護霊、守護神によつて守られているのです。この守られ方は、地上における無私なる母と子の愛に似ています。愛するわが子のためなら、何でも惜しまず、愛しつつづけ、励ましつづけ、勇気づけ、智恵を授け、本源の生き方に導こうとしておられるのです。守護霊、守護神様は、それらの導きや守りを通して、我々に究極の真理・我即神也の本来の姿、崇高なる神の姿を思い出させ、顕現させようとしておられるのです。そして、私たちが一刻も早く我即神也を理解できるよう促し、時にはメッセージを与えてくださるのです。

守護霊、守護神様は、あくまでも私たちが本心に目覚め、無限なる愛、無限なる赦し、無限なる生命、無限なる健康、無限なる愛、無限なる叡智を顕しつづけてゆけるまで、根気よく見守り、能力を発揮しやすくさせるためのものです。

守護霊、守護神は、今生における親子のように親しい間柄なのです。そのため、守護霊、守護神に対して、自分の心の内をすべて打ち明け、語り尽くすことができるのです。

「今、私は病気で苦しんでおります、どうしたらよいでしょうか。今、私はさまざまな問題を抱えております、一体どうしたらこの問題を解決することができましようか。今、私は夫婦間で不調和です、どうしても夫（妻）を赦すことができません。私たちの子供は、どうしてもこのように登校拒否を繰り返すのでしょうか。私の会社は倒産しました。リストラで悩んでおります。……」

私たちは、背後にて日夜、見守り、導いておられる守護霊、守護神様に、このようにお祈りします。そしてお願いいたします。頼み事をします。それはそれでよろしいのです。私たちが守護霊、守護神に祈れるということは、我々の心の中で守護霊、守護神の存在を確信しているからです。守護霊、守護神のほうも祈りにより我が子とつながれることは、こんなに喜ばしいことはないのです。

しかし、守護霊、守護神は直接に私たちの願いや望みをかなえてくれるわけではありません。これにはもつと深い真理

が隠されているのです。

私たちが守護霊、守護神に祈ることにより、願い事や頼み事をする事により、自分たちの苦しみや悩み、難題を守護の神霊に聞いてもらったのだという安心感がもたらされません。そのため、守護霊、守護神に対して心から信頼し、感謝の念が湧き起こってくるのです。これは、自分の悩みを守護霊、守護神にすべて託した事により、自分の心からそれらの悩みを解き放ったからです。それによって、自らの考え方がネガティブな考え方からポジティブな考え方に変わり、自らの心に希望や喜びや平安が湧き起こってくるのです。すると、今までの自分には、自分一人では恐くて、自信がなくてできなかった何事も、自然にできると思えるようになるのです。そして守護霊、守護神のご加護を心より信頼し、確信し、一步を踏み出す勇氣と力が湧いてくるのです。

そしてついに、自分の抱えていたすべての難題が解決することになります。これはあくまでも自分の内なる力で成し遂げているのです。これこそ、今まで自分自身の内面で眠っていた無限なる能力が引き出されて起こった現象です。

守護霊、守護神が直接、私たちの悩みや苦しみを解決したり、取り除いたりはしていません。

もし、その権限が守護霊、守護神にあるのなら、守護霊、品を代え、私たちが懇切丁寧に見守り、導いておられるのです。故に、その守護霊、守護神の真なる導きが理解できた人は即、自らの内なる無限なる能力を発揮し、自らの神なる叡智により、自らが救われてゆくのです。

しかし、守護霊、守護神の必死の導きにもかかわらず、いまだ本心に目覚めず、他に依存する人々は、守護霊、守護神に同じように祈りを捧げても、なかなか救われ得ないのです。これは逆に、守護霊、守護神のメッセージなのです。

“いつまでもこういう状況にあるのはなぜか？”どこが間違っているのか？自分の考え方にあるのか？根本的な間違いは何なのか？”と反省を促しているのです。それは、真理に目覚めるためのチャンスなのです。

その際、五井先生は「守護霊、守護神への感謝の心をつねに想い、世界平和の祈りを祈りつづけてゆけば、個人も人類も真の救いを体得出来るものである」と説いておられるのです。

自分の本心を開発し、真理に目覚めるためには、守護霊、守護神へ願い事や頼み事ばかりをするのではなく、世界平和の祈りという大乗的な祈り言を祈ることです。そのことによつて、自らの魂のくもりが払われ、さらに早く、さらに強く光り輝いた本心が現われてくるのです。しかも世界平和の祈り

守護神を同じように愛しつづけ、信頼し、必死に祈りつづけている人々のうち、ある人の病氣や苦しみが癒され、他の人は癒されないということが生じるはずはありません。これは、守護霊、守護神が直接、彼らの悩みを解決する権限を持ってはいないということです。

しかしそれは、守護霊、守護神が救ってくれないということではなく、あくまでも私たちの自由なる選択に敬意を表していることです。そして善も悪も、幸も不幸も、我々の自由なる選択にゆだねられているのです。

### 守護霊、守護神が望んでいること

守護霊、守護神様は、なぜ、今、私たちが苦しまなければならないのか、悲しまなければならないのかの原因を教えてください。私たちがいつとも同じように、他に依存するばかりで、自らの内にある無限なる能力に目覚めず、その力を発揮しようとしてもしないことは望んでおられないのです。

守護霊、守護神様は、このことを通し、我が子が一刻も早く真理に目覚めるよう促し、教え導いておられるのです。究極の真理“我即神也”に限りなく目覚めるよう、手を代え、は、個人の願望成就のみならず、世界人類一人一人の真理の目覚めにも大いなる働きを為しつづけ、世界平和のために貢献していることになるのです。

守護霊、守護神の働きは、本人の権能の力を奪い、依存力を高めるためのものではなく、逆に、他への依存力をなくし、本人の本来内在せる無限なるものへと目を向けさせることにあります。本心開発にあるのです。そして自分の内にある無限なるすべての能力を発揮せしめ、権能の力を他に与えることなく、自らの力ですべてのことを成就してゆけるよう、常に見守り導いておられるのです。

そうしてゆくうちに、“我即神也”の真理が真に理解されてくるのです。

### 宣言文を唱えようと、 前生の因縁が小さく消される

本来の自分自身が語る言葉は、苦しみではなく、悩みではなく、嫉妬に狂った言葉ではなく、守護霊、守護神への感謝の言葉です。さらには、無限なる愛の言葉、赦しの言葉、智溢れる言葉を語り、そして無限なる感謝の想いを発し、無限なる愛と真と赦しの行為を表わしてゆくのです。

『即ち、神の言葉、神の想念、神の行為とは、あふれ出る、無限なる愛、無限なる叡智、無限なる歡喜、無限なる幸せ、無限なる感謝、無限なる生命、無限なる健康、無限なる光、無限なるエネルギー、無限なるパワー、無限なる成功、無限なる供給……そのものである。そのみである。故に、我即神也、私は神そのものを語り、念じ、行為するのである。』

この我即神也の宣言文は、前にも述べた通り、人に宣言すべき、そして人に強制すべき言葉ではないのです。あくまでも自分自身に語りかけ、本心に強く訴えかけ、魂に向かつて宣言するものです。

この宣言文を繰り返し、繰り返し唱えつつけることにより、前生の因縁は大難が小難に変わります。そして前生の因縁が運命と現われて消えてゆく時に起こる姿が限りなく小さく小さくなるのです。苦悩は小さく消え去ってゆくのです。なぜならば、それは、我即神也の真理を魂に刻み込むことによつて、前生の因縁に振り回されたり、把われたり、恐怖したりする心が薄らいでゆくからです。

宣言文の言葉そのものが真理の光であり、パワーであり、エネルギーそのものであるから、それらの言葉が持つ光、パワー、エネルギーが因縁をことごとく洗い浄め、本来ならば、いるのです。この肉体の上に、言葉、想念、行為を通して、神の姿、崇高にして神々しく慈愛に満ち溢れた神の姿を現わすために、この世に天降あふりくだっているのです。人類一人一人は、この神の姿を顕現させてゆくための大天命を背負って生きていくわけですから、それら無限なるものすべては、もともと自分の中に存在しているのです。今生において神の姿を顕すために、自分の肉体そのものを神にまで高め上げ、昇華するために、今生にてさまざまなことを学び取るのです。

本来、人間の中には、成功も失敗も、優秀も、善悪もないのです。神の世界は、大調和一元の世界、すべてが完全円満なる世界です。

今生における不幸、苦悩はすべて二元対立より発しています。この二元対立を超えたところに大調和、天地一体、神人一如、我即神也の輝かしい世界が展ひらげているのです。

私たちは一刻も早く、この二元対立の想念の世界を超えなければなりません。自分自身の中にある二元対立の想念こそがすべての不幸の元凶です。自分の中にある対立の感情こそが差別を生み出してゆくのです。人間を真理より外れさせ、優劣、勝負、幸・不幸、成功・失敗の二元対立の世界、業生の世界に引きずり落とすしてしまうのです。

そのために、宣言文の次の部分で、『即ち、神の言葉、神

前生の因縁として現象面に現われてくるはずの消えてゆく姿さえも、現われずに消え失せてしまうのです。

自分自身に、自分は本来神である、我即神也という真理をインプットすることは、素晴らしい相乗効果を發揮してゆくのです。

### 神の言葉、想念、行為の中には 二元対立がない

神は、単純に言えば、自分の中に初めから存在しているものなのです。そして自分の中に初めからあるものは、もちろん人の中にも初めから存在しているのです。ただ、誰も気がつかないだけのことです。忘れてしまつて、思い出せないだけのことです。それを想い起こすために、何回も何回も自らに真理の言葉を語り聞かせ、納得させてゆくのです。

では、「神の言葉、神の想念、神の行為」とは、一体何なのでしょう。それは、神の中には一切の否定的な言葉、想念、行為はない。神の中には努力や忍耐の言葉も一切ない、ということです。「神の言葉、神の想念、神の行為」は、完全円満、完全調和、大進化そのものなのです。

私たちは、この神の大調和を現わすために、この世に来ての想念、神の行為とは、あふれ出る、無限なる愛、無限なる叡智、無限なる歡喜、無限なる幸せ、無限なる感謝、無限なる生命、無限なる健康、無限なる光、無限なるエネルギー、無限なるパワー、無限なる成功、無限なる供給……そのものである。そのみである』と説かれているのです。

この真意はどこにあるのかというと、神の言葉、神の想念、神の行為の中には、二元対立が全く存在していないということです。故に、言葉も、想念も、行為もすべて大調和、大進化をたらすことのみ。そこには不幸も、不調和も、失敗も、病も、闘争も、挫折も、孤独も、苦悩も、悲惨も、冷酷も、殺意も全くない。光一元の世界からあふれ出てくる言葉、想念、行為は、無限なるものすべて……であるというのです。

### 『我即神也』を繰り返し唱えよう

私たちは、常にこの神の大み心である、無限なるすべてに心を向け、宇宙神に心を合わせるべく、自らに『我即神也』と宣言することによつて、魂に、その真理が深く刻まれるのです。その宣言を何十回、何百回、何千回、何万回繰り返し返すたびに、私たちの魂の世界は、我即神也そのもの大調和に自然に調とよってゆくのです。

故に、他の人がいかなる二元対立の言葉を語り、想念を発し、行為を表わそうが、自分たちの心は、常に光り輝く神の無限なる言葉、想念、行為に支えられ、心の中に充分に充電され尽くしているのです、決して他の否定的想念、二元対立の想念行為に引つかからないのです。むしろ、自分たちの大調和したひびきが他に強く影響を及ぼし、他に少しずつ真理に目覚めるきっかけを与えているのです。

でありますから、この無限なる言葉を自分自身に何万回と語りかけることによって、自分は本当に変わっていつてしまうのです。“南無阿弥陀仏”の唱名と同じです。しかしこれは、あくまでも知識ではないのです。実行することによってのみ、真理が目の前に輝いてくるのです。無限なる言葉のひびきは、それこそ世界平和の祈りのひびきと一つです。世界平和の祈りを祈ると全く同じです。自分に一番適したものを選んで、確実に行なうてほしいと思つていきます。

この無限なる言葉が続くその後には「……そのものである。それのみである」とはつきり断言されています。これは、神の言葉、想念、行為は、光明の言葉、想念、行為そのものである、それのみである、と断言されているのです。私たちは日常生活において、できるだけ意識して、二元対立の言葉を使うのではなく、大調和した光明の言葉のみを心して使つて

ゆく必要があるのです。

そして、『故に、我即神也、私は神そのものを語り、念じ、行為するのである』と説かれています。

無限なる光明の言葉のみ、想念のみ、行為のみを何千回、何万回と繰り返し返してゆくと、魂の中に、この言葉のみが深く刻まれて、我即神也の真髓のみが強く刻まれるので、いつの間にか、私たちは神そのものの無限なるもののみを語り、念じ、行なうようになるのです。

最後において、

『人が自分を見て、「吾は神を見たる」と、思わず思わせるだけの自分を磨き高め上げ、神そのものとなるのである。

私を見たものは、即ち神を見たのである。私は光り輝き、人類に、いと高き神の無限なる愛を放ちつづけるのである。』

と結ばれています。

“我即神也”を“南無阿弥陀仏”のように、我即神也、我即神也、我即神也……と何万回と自分自身に宣言し、語りかけると、自我は全く取れ、自然法爾じねんほうにに生きることができるようになります。そうすると、自分自身が他と何も比較することがなくなり、他のすることを何でも受け入れ、救せるように

す。常に高い高いミッションに向かって精進している人々なのであります。

神のようになるためには、常に神になろうとする心が働かなければ、決して神のようになるものではありません。その点、我即神也の真理は、私たちが日常生活を通して、見事に達成できる事柄なのです。理屈をこねず、素直に信じてやることこそ尊いことなのです。自分自身に対して、ただひたすら“我即神也”を唱名念仏のように唱えつづけているだけで、言葉の持つ素晴らしい威力により、必ずそれは成るのであります。そのため、「私を見たものは、即ち神を見たのである」という真実が現実には現われはじめなのです。神の世界、神の姿とは、愛のみ、光のみ、大調和のみ。そこに一切の闘争も、戦争も、差別も、分裂もない世界。すべてが光り輝き、すべてが一つに融け合い、すべての存在を慈しみ、尊び、大切にしている世界であります。

“我即神也”を何万回と宣言していくうちに、いつの間にか、「私は光り輝き、人類に、いと高き神の無限なる愛を放ちつづける」のです。

そのため、周りの誰もが安心して、自然体に振る舞うことができるようになるのです。自分の欠点を見られようが、弱点を暴かれようが、自分の汚点を見透みすかされようが、そんなことには一切関係なく、何一つ恐れることもなく、不安に思うこともなく、安心して、あるがままの自分を表わすことができるのです。

そういう姿は、人をして「吾は神を見たる」と、思わず思わせてしまうのです。二元対立を全く超えてしまっているのです、そこに一切の隔へだたりも、差別も、分離もなく、いつも調和の状態に保つことができるのです。そんな状態を常につくり出しているのは、神そのものの姿に等しいのです。また、そうなるよう努力し、精進し、磨き高め上げてゆくのであります。

この我即神也の宣言文を唱える人たちは、自分の目的がそこにあることに気づいている人たちです。自分の今生における目的達成のために、この中に書かれている真理そのものを自分の内に顕現しようと限りなく想いつづけている人たちで